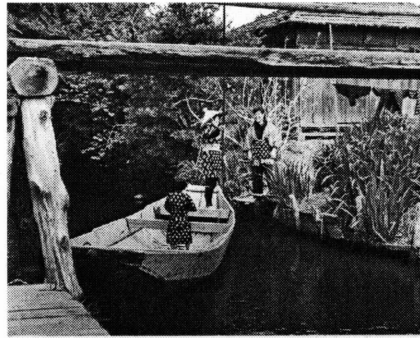


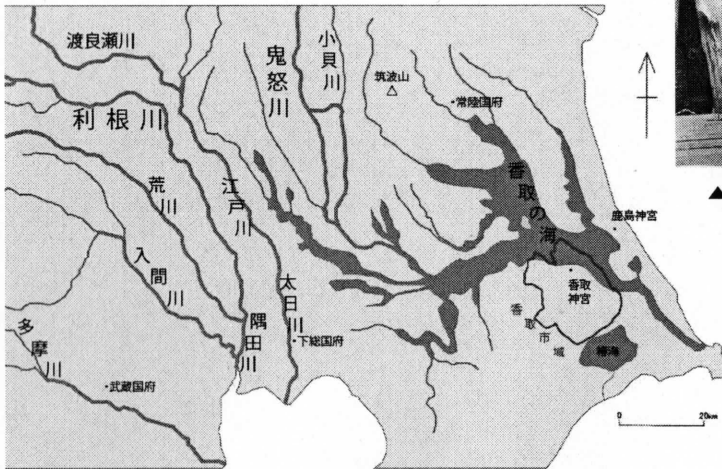
# 香取遺産

vol.148

## 利根川が流れる前と後 香取の海と新島十六島



▲生活に直結した舟と江間(昭和初期)



◀1000年前の流域想定図(香取の海に含まれる市域が新田開発された)

市の北部には、利根川が西から東へ流れています。その水は水郷地帯の米どころに肥沃な土壌を広げ、両総用水を通じて九十九里平野の水田や工場にも供給されています。多くの恵みをもたらす利根川は、かつては東京湾へと注いでいました。

利根川が市の北部を流れる前は、現在の霞ヶ浦や印旛沼にまたがる広大な内海「香取の海」が広がっていました。平安時代にあたる約1000年前には上図のような状態であったと考えられています。

河川の流路が図の北西部周辺に集中するのは、関東造盆地運動によるものとされています。この地下深くのプレート運動の影響で、東京湾中心部と茨城県古河市付近を軸に沈み込みが起こり、厚い所では基盤まで約3000mも土砂が堆積しました。

香取市を中心に見ると上流側が沈み込んでいたために西側の標高が低く、河口寄りの東側の標高が高いという逆転現象が起きています。そのため、香取の海は遠い所で河口から約100km地点まで谷に海水が入り込む特異な内海が形成されました。

江戸時代には、徳川家康の命で江戸幕府による利根川東遷事業が行われ、60年にわたる工事



●は、今でも水路が残る十二橋

の末、利根川・渡良瀬川の流れは銚子から太平洋に注ぐようになりました。これにより江戸城下町の水害が軽減され、銚子から江戸までの河川航路が東廻り航路として活用されました。また、利根川中流域をはじめとする新田開発、東北の伊達氏に対する防備の役目も果たした一方で、デメリットとして利根川下流域では水害が増加しました。

その後、香取の海は急速に土砂が堆積して面積が縮小しましたが、これによって生じた土地を活用し、江戸時代初期から始まっていた新島十六島の開発がさらに進みました。

この地域では、日常生活に船を利用し、水路(江間)が日常の通り道となっていました。また、増水時にも対応できるように水屋(基礎を高く盛った2階建ての蔵兼避難小屋、水塚ともいう)を設けるなど、水と共に暮らす工夫がなされてきました。

関生涯学習課

☎(50)1224